



カツト

故七世野澤吉兵衛

吉兵衛師のレコード

下村海南

明治の末葉に同郷の日本橋病長の岡本武次、外務省の通商局長中村巍兩君の勧めにより杉風會に入會、豊澤富助師についたが、凝り性な僕は富助老一人でももの足らず鶴澤重太郎老にもカケ持ちで稽古する。本省で三つほど仕事をかけ持してゐるところへ横濱の局長まで兼任になつた時、この調子で義太夫に凝つては本業がおろそかになると無理に思ひ切つてしまひ、すつかり中絶したばかりでなく、大正十年朝日新聞社に入社してからは一切宴席などでも口にしない事にした。

藝界展望

- ▽文樂の六月 勸進帳（辨慶—大隅、榮三）由良湊千軒長者、千本櫻（道行、川連法眼館）朝顔日記。古靱は法眼館の切、狐忠信は玉藏改め玉造、静は文五郎、義經は紋十郎。
- ▽文樂の東上 新橋演舞場、七月一日初日、廿五日まで、藝越五日替り、古靱櫓下披露。
- 第一回（一日—五日）二人禿。先代御殿（呂仙糸、織、團六、南部、重造、伊達、勝平、一日替り）妹背山道行。熊谷陣屋（中大隅、清二郎、切古靱、清六）合邦。
- 第二回（六日—十日）千本櫻道行、川連館（相生、吉五郎、勝芳、織、團六、吉季一日替り）酒屋。尼ヶ崎（中呂、仙糸、切古靱、清六）吃又（大隅、清二郎、荷友）團子賣。
- 第三回（十一日—十五日）朝顔日記。良辨杉志賀の里より二月堂（古靱、清六）小牧山（大隅、清二郎）阿古屋琴責。
- ▽演劇協會關西支部上期總會 六月五日大阪軍人會館に開催。その結果、今後愈々演劇報國に邁進することとなつた。
- ▽東都五十義會 六月八日より十日まで日本

昭和の十年還暦の時海南莊でお祝ひをする。社中同人からあらゆる隠くし藝が演出される事になつて今まで全然オクビに出さなかつた義太夫を語る事になる。そこでおさらへをして貰つたのが同じ西宮夙川の野澤吉兵衛師であつた。

番組が立て込んでゐる上に、あまり長いとお客さまの迷わくとき雨の枕と酒屋を枕から宗岸のくどきよりサツリへ飛んでの二くさりとして、吉兵衛師の宅へ五度ではきかないが十度とまでは通へなかつたと思ふ。

海南莊なる白雲樓上に吉兵衛師の糸で岡本鶴松、中村喜三郎兩君の太十のカケ合について、僕が二くさり簡単に片づけて音メのよいところだけはお聞に達した次第であるが、社中の同人在阪神の知人はじめて僕の義太夫を聴く、いやはじめて僕が義太夫を語るといふ事を知つたのであつた。

吉兵衛師と僕との縁はこれだけで、それからはいつも前進座の連中が大阪へゆくと吉兵衛師をたづねて教へを乞ふ、そのゆきかへりには海南莊へたづねて見えて、師匠のうはさも絶えず耳にした事であつたが、その後すつかり無沙汰に過ぎてゐた。故人の糸は、土佐太夫の語りもののレコードに残つてゐる事と思はれるが、僕も紀念の爲に堺のナントカいつたレコード製作のスタヂオへ出かけ、吉兵衛師の糸で前にあげた二くさをレコードに納めてゐる。名人のよい音メにふさはしい太夫の語り物は珍らしくもないが、下手くそな素人へいかに名人の糸が合はされて行くか、そうした参考品としてはこのレコードもけだし珍なるものかも知れない。

今東京の市議選舉に足をつゝ込んでとても氣忙しない。あわただしく思ひ浮ぶまゝ走り書きをする。(十七、五、三十)

構俱樂部に競演。出演者九十四名。

▽新劇團の創立。藤見庸太郎、松本泰輔等の國民喜劇(指導者—益田甫)ムーラン新劇座合同の珊瑚座(菊岡久利)夢聲、丸山、御橋等の喜劇(東寶後援)組織さる。

▽藝能使節尾上菊五郎、滿洲建國十周年慶祝藝能使節として菊五郎が選拔され、一門を率ゐて進發した。七日、我が政府が捧呈した日本藝能の台覽劇も首尾よく演了され、八日より五日間公演を開催、入場料に莫大なプレミアが附く程の盛況。新京より奉天を目度打上げ、二十二日歸京。

▽井上正夫、水谷八重子の合同劇來阪七月大阪歌舞伎座に出演と決定。

▽梅若の東寶進出。三月末三日に亘り帝劇再開記念に公演した梅若能は頗る成果を挙げたので、更に五月廿七日、海軍記念日の招待能(八島)の後、夜は一般公開として俊寛、葵上、土蜘蛛を上演し、劇場進出といふ劃期的な新記録を愈々明確にした。

▽千兩役者六十五人。内務省調査、演技部員數—男八四三八、女四四五七。千圓以上(男五三、女一三)五百圓以上(男七五、女二九)最も多數は三十圓以上(男二五三四、女二一八五)等々……。